

10 月 4 日 (土) 【言語】① Sábado, 4 de octubre 【Lingüística】①

Crisis hay muchas en nuestra vida —分割文に関する一考察—
Crisis hay muchas en nuestra vida: una consideración sobre las oraciones de
topicalización dividida

喜多田敏嵩 (Toshitaka KITADA)

土屋亮 (Ryo TSUCHIYA)

現代スペイン語において (1) (2) のように、名詞と数量詞が動詞を挟んで分離している例が散見される。

(1) [...] malas personas hay pocas, [...].

(2) [...] nieve había mucho [...]

(CORPES XXI)

本発表の目的は、ロシア語において「分割文」という名で知られる分離構文を考察し、その成り立ちを議論することである。数量詞と名詞句が分離する現象としては「数量詞遊離 (quantifier floating)」が知られているが、RAE & ASALE (2009) が指摘するように、数量詞遊離が生じるのは主に定の主語名詞句であるうえ、(3) (4) (5) が示すように「強い数量詞」(Milsark 1974) しか遊離しない。

(3) Los invitados se fueron todos a medianoche / se fueron a medianoche todos

(4) *Los jugadores estaban muchos desanimados

(5) *Los capítulos del libro contienen varios un pequeño resumen

(RAE & ASALE 2009: 1435, 19.10)

分割文において名詞句と分離するのは、いずれも弱い数量詞や形容詞 (相当) 句であるため、分割文を数量詞遊離とみなすのは適切ではないというのが第一の主張である。

(6) Libros leo muchos.

(<https://eidedesign.eus/quien-quien-javier-vidorreta/>)

(7) [...] muebles no compro no nuevos ni de segunda mano.

(<https://forocoches.com/foro/showthread.php?t=2787596>)

くわえて、以下の (8) や (9) のように、動詞後方に残留する名詞句が DP あるいは単数名詞句であることで、移動前の構造を適切に想定できない事例も存在するため、分割文の文頭名詞句は基底生成によって当該位置を占めると考えられる。

(8) Novelas escribió solo “Le diable” y “Le bal”.

(9) Libros te puedo dar solo uno.

(Laca 2013: 115)

実際に基底生成を想定して無冠詞複数名詞句の話題化を扱った Laca (2013) によれば、動詞後方には文頭の無冠詞複数名詞句と同一の指標が付された不定表現 $\emptyset$ が存在し、スペイン語に広く見られる「不定項省略 (Indefinite Argument Drop: IAD)」という現象により $\emptyset$ が省略されることで、無冠詞複数名詞句の話題化構文が得られる。

(10) Novelas leo $\emptyset_i$.

(11) [novels_i] $\exists y \emptyset_i (y)$ & (Speaker *READY*)

(Laca 2013: 113)

Laca はこの手法が Libros leo muchos. のような分割文にも適用可能だと唱えているが、詳細な議論はしていない。本発表の第二の主張は、Laca の枠組みを用いることで分割文が同様に説明可能であることである。

(12) Libros leo muchos $\emptyset_i$.

(13) [books_i] MANY x [$\emptyset_i (x)$] [$\exists x$ (Speaker *READY* x)]

最後に、本発表は Laca (2013) が扱っていない分割文も議論に含めて、文頭名詞句の基底生成説を補強する。

10 月 4 日 (土) 【言語】② Sábado, 4 de octubre 【Lingüística】②

「新しい心理動詞」の構文選択—与格構文の拡がり—
**Verbos psicológicos recientes y la expansión de la construcción con dativo
experimentador**

西口将司 (Masashi NISHIGUCHI)

本研究は、20 世紀以降に新たに語彙として参入した心理動詞について、それらが選択する構文とその使用頻度を通時的に調査し、構文選択の背景にある要因を意味論的観点から考察することを目的とする。

スペイン語の心理動詞は、歴史的に様々な構文変化を遂げてきた。たとえば、動詞 *gustar* は、他動詞構文 '*gustar*' → 自動詞構文 '*gustar de*' → 与格構文 '*gustarle*' という劇的な構文変化を経験してきたことが先行研究により指摘されている (Whitley 1998; Melis & Flores 2018)。また、Whitley (1998) は英語とスペイン語の心理動詞の通時的変遷 (12 世紀～20 世紀) を追い、両言語において一定の方向性をもった構文変化 (*drift*) が長期にわたって進行していることを明らかにした。

本研究は、以下の 2 点の問いに基づいている。「この *drift* は現代においても継続しているのか」、「構文選択の背景には意味的要因が関与しているのか」。これらの問いに対して、通時コーパスを用いた使用頻度の調査を行い、考察を試みた。調査には Google Books Ngram Viewer および CORPES XXI を用いて、1900 年から現在にかけて心理動詞と共起する構文の用例を収集した。

調査の結果、「好き」「夢中になる」などの意味カテゴリーに属する一部の心理動詞が、従来の構文変化のパターンとは異なる振る舞いを示すことが確認された。従来、多くの心理動詞はまず対格構文で使用され、その後与格構文へと変化する傾向 (e.g. *encantarla* (対格構文) → *encantarle* (与格構文)) が指摘されていたが、本調査では、*molar* や *chiflar* などの新語が参入初期から一貫して与格構文を選好していることが確認できた。この結果から、使用頻度が極めて高い動詞 *gustar* がスキーマ化しており、新たに参入してきた心理動詞の構文選択に影響していると考えられることが明らかになった。さらに、本発表では Nishiguchi (2023) で提起した「知覚可能性 (*perceptibilidad*)」の観点から、心理動詞構文システム内の「対格構文の衰退と与格構文の台頭 (*overriding*) の相関」について考察を加える。

参考文献

Melis, C. & Flores, M. (2018). Chapter 6. The dative experiencer of Spanish *gustar*. In M. Bouzouita, I. Sitaridou & E. Pato (Eds.), *Studies in Historical Ibero-Romance*

Morpho-Syntax, 123-148. John Benjamins Publishing Company.

Nishiguchi, M. (2023). *Dative Experiencer: A cognitive linguistic analysis of Spanish psychological verb constructions and Japanese X-wa Y-ga Z constructions*. Doctoral dissertation, Kobe City University of Foreign Studies.

Whitley, M. S. (1998) Psych Verbs: Transitivity Adrift. *Hispanic linguistics*, Vol.10, No. 1, 115-153.

10 月 4 日 (土) 【言語】③ Sábado, 4 de octubre 【Lingüística】③

parecer + 不定詞構文の意味機能

Las funciones semánticas de la construcción *parecer + infinitivo*

岡あゆみ (Ayumi OKA)

parecer + 不定詞構文は、近年、動詞迂言形として位置づけられる傾向にある (RAE y ASALE 2009; Nieuwenhuijsen 2017, 2020)。ただし、その迂言性の度合いを評価するためには、当該構文がどのような意味機能 (手続き的意味) を実現しているかを検討することが重要である (Garachana Camarero 2017)。

この点を踏まえ、本発表では、現代スペイン語のコーパス (CORPES XXI や Corpus del Español など) において、parecer + 不定詞構文が、RAE y ASALE (2009) で示されているような助動詞 poder + 不定詞に先行する用例だけでなく、後続する用例も見られるという点に着目し、これらの語順の違いがもたらす意味機能や語彙的意味の幅、および解釈上の曖昧性について記述的に検討する。

なお、当該構文の意味機能については、先行研究において認識的モダリティ (RAE y ASALE 2009)、エビデンシャルティ (Cornillie 2007)、緩和 (Morimoto y Pavón 2007) などが指摘されている。しかし、助動詞階層に関する研究 (Cinque 2013) が示す「発話行為モード > 評価的モード > 証拠的モード > 認識的モダリティ > その他モダリティ > 動詞」という階層に parecer + 不定詞を位置づけた場合、助動詞 poder に後続する用例について整合的な説明を与えることが難しい。

そこで本稿では、parecer + 不定詞の意味的機能を助動詞階層の中で捉えるのではなく、助動詞を語彙的助動詞と機能的助動詞に分ける区別 (Bravo, García Fernández y Krivochen 2015) を導入するとともに、動詞の活用形態素や完了時制が担うグラウンディング機能 (Langacker 1991, 2008) が意味実現に関わるという観点を新たに提示し、整合的な説明を提示する。

すなわち、parecer + 不定詞の意味機能は、構文単独で実現されるのではなく、活用形態素や完了時制によるグラウンディング機能とともに相互依存的に実現されるという仕組みを提案する。これにより、助動詞階層理論では説明が困難な語順の問題に対して、整合的な説明を与えられる可能性を示す。

10 月 4 日 (土) 【言語】④ Sábado, 4 de octubre 【Lingüística】④

<Ser+ locativos> 構造の意味と機能に関する一考察：主語は事象名詞に限られるのか？

Una revisión sobre los valores gramaticales y semánticos de la construcción

<ser+locativo>: ¿Se restringe el sujeto a sustantivos eventivos?

二宗美紀 (Miki NISHU)

スペイン語における場所表現とコピュラ動詞 *ser* / *estar* の選択については、Luján (1981) や Camacho (2012) などが指摘している。主語が移動可能な存在（有生物または無生物）の場合には、場所を表す前置詞句とともに動詞 *estar* が用いられる (Luján, 1981: 187)。一方、主語が不動の無生物である場合には、*ser* と *estar* のいずれも使用可能であり、その選択は方言や話者の判断に依存する。この際の動詞の選択は、述語の一時性 (stage-level) と恒常性 (individual-level) という意味的対立と必ずしも一致しない点を、Camacho (2012) は指摘している。

さらに、主語が出来事として解釈される場合、*estar* は使用できず、*ser* のみが許容される。場所を表す前置詞句は *ser*・*estar* の両方と共起可能だが、主語が出来事である場合には *estar* の共起が禁じられる。この制約は、場所述語以外では見られず、*estar* + 場所前置詞句の構造に統語的・意味的要因が関与していることが示唆される。

このように、場所表現とコピュラ動詞の共起には一定の傾向が見られる一方で、例外的な用法も観察される。本研究では、*ser* の後に時空間表現が現れる構文が、主語が事象名詞（出来事）の場合に限定されるのかを主たる問いとして検討する。

発表では、スペイン王立アカデミーの CORPES XXI を用い、〈es + aquí〉など場所を表す指示詞を含む用例を収集し、〈*ser*+locativos〉構文の意味と機能を考察する。検索の結果、主語が事象名詞に限られず、一般名詞が主語になる例も確認された。また、抽出された例の多くは強調構文であったが、それ以外の *ser* の使用の傾向も見られた。

さらに、高垣 (2014) の *ser* の同定機能に関する 4 分類と照合し、場所性と同定性の関係を検討する。

これは、SLP/ILP の理論が一定の範囲においては有効であるが、その適用可能性には限界があることを示唆している。

参考文献

- Camacho, J. (2012) *Ser and Estar*. The individual/stage-level distinction and aspectual predication. In *The handbook of Hispanic linguistics*. 435-475. J.I. Hualde, A. Olarrea and E. O'Rourke (eds.) Oxford: Blackwell Publishing.

- Luján, M. (1981) The Spanish copulas as aspectual indicators. *Lingua* 54. 165-210.
- 高垣敏博 (2014) Te digo dónde {es / está} el taller – ser の意味は？. 『スペイン語学研究』第 29 号. 東京スペイン語学研究会. pp.87-102.

10 月 4 日 (土) 【言語教育】① Sábado, 4 de octubre 【Didáctica】①

ノンネイティブがスペイン語で行うスペイン語の授業
—教養科目（第二外国語）での実践例とアンケート調査に基づく授業運営に寄与する要素についての考察—

Clases de español en español por docente no nativo: un ejemplo de práctica como segunda lengua y reflexiones sobre elementos que contribuyen a la gestión de las clases basadas en resultado de una encuesta

中島さやか (Sayaka NAKAJIMA)

日本の大学における教養科目（第二外国語）としてのスペイン語の授業では、ノンネイティブである日本人教員が教授言語としてスペイン語を使用するケースは少ないと指摘されている。その背景には、「ネイティブは会話、日本人は文法」といった役割分担の存在、週 2 回の少ない授業数では目標言語の知識が定着しにくい現状等、様々な理由があると考えられる。しかしながら、先行の実践例及び調査結果(Hiroyasu 2017 等)、第二言語習得の研究が示す「インプット」の必要性、及び、ノンネイティブの教員の役割に関する研究などを考慮すると、日本人教員がスペイン語を教授言語として使用する教育上のメリットは少なくないと考えられる。

本発表ではまず、上智大学における週二回のスペイン語の授業において、教授言語をスペイン語にした実践例について、共通プログラムや使用教科書などの一般的な情報、授業における母語（日本語）と目標言語（スペイン語）の使い分け、授業に組み込んだ要素（ティーチャートーク、インプット理解を促進するための工夫、サポートとしての LMS の使用等）を中心に紹介し、次に、2024 年に実施した学習者へのアンケート調査の結果を元に、授業運営や学習効果を高めることに寄与すると考えられる要素について言及する。そして、同様の授業に関して 2019 年に実施したアンケート調査の結果で明らかになった、学習者が授業で感じる「全然わからない」という感覚が、どの程度の期間を経て変化してくるのかという点についても、2024 年の学習者の回答を元に分析し、最初の困難な時期を克服するためのポイントについて考察する。

10 月 4 日 (土) 【言語教育】② Sábado, 4 de octubre 【Didáctica】②

学習書にみる日本のスペイン語教育：125 年間の量的分析

La enseñanza del español en Japón a través de los manuales de aprendizaje: un análisis cuantitativo de 125 años

廣康好美 (Yoshimi HIROYASU)

日本の高等教育機関におけるスペイン語教育は、1897 年に高等商業学校附属外国語学校にスペイン語専攻課程が設置されたことに始まる (寺崎 2019)。その後、スペイン語教育は多様な発展を遂げ、2021 年度には全国 228 の大学で 845 人の教員がスペイン語教育に従事し、約 6 万 4 千人の大学生が専攻言語または第二外国語としてスペイン語を学んでいる (Moyano et al. 2025)。本研究は、この約 125 年間にわたる大学におけるスペイン語教育の変遷を、出版されたスペイン語学習書を分析して記録する試みである。

スペイン語教育の歴史に関する先行研究は少なくなく、たとえば浅香 (2018) は、スペイン語教育に携わり書籍や辞書を著してきた研究者に焦点を当て、日本人のスペイン語との出会いから昭和期までの教育の変遷をまとめている。また、福嶋 (2004) は、スペイン語教育に関する研究文献の網羅的な一覧を提示している。

本研究ではこれら先行研究や国立国会図書館の蔵書、ネット書店で販売されている書籍等を基に、スペイン語学習のために紙媒体で出版された書籍のリストを作成した。辞書は含めず、その数は約 1000 冊にのぼる。それらの書籍を、大学等での教科書、自習書のほか、文法、会話、旅行、語彙、手紙、試験対策等に焦点を当てた書籍に分類した。このリストの量的分析から、いつごろスペイン語教育がより活発になってきたか、各時代に多く出版された書籍の種類、著者や出版社の傾向など、多くの興味深いデータが得られた。現在、それらの書籍の内容を精査し、各時代に用いられた主要な教授法を整理する作業を進めている。本発表では、この量的分析を中心に、スペイン語学習書から見た日本のスペイン語教育の変遷について報告する。

10 月 4 日（土）【言語教育】③ Sábado, 4 de octubre 【Didáctica】③

日本の高等学校等におけるスペイン語科目の開設状況
El estado actual de la oferta de clases de español en los centros de bachillerato en
Japón

廣瀬瞳（Hitomi HIROSE）

日本の高等学校等（中等教育学校などを含む）における英語以外の外国語科目の開設状況については、文部科学省が隔年で行っている調査「高等学校等における国際交流等の状況について」が唯一の手掛かりとなっている。しかし、その調査報告の中では、①英語以外の外国語科目を開設している学校（公立、私立、国立）および履修者の総数、②各言語の実施校および履修者の総数、③開設学校数と言語別の開設学校数の推移が示されているものの、開設校名が公表されていないため、地域ごとの実施率や具体的な単位数や位置づけといった英語以外の外国語科目の具体的な実施状況を把握するには不十分である。

そこで、発表者は他の言語の研究者と協力して共同研究チームを組み、英語以外の外国語科目を開設している学校を調査した。具体的には、文科省によって設定された学校コードをもとに、日本の高等学校等のウェブサイトと各都道府県教育委員会に開示請求を行って得た教育課程表とそれに準ずる資料を参照し、英語以外の外国語科目の授業の実施の有無を調べた。

本発表では、とりわけスペイン語の開設状況に焦点を当て、その調査の結果について、都道府県別ならびに公私別の実施校数や実施率などを他の言語と比較して考察を行う。また、スペイン語の授業が開設されている高等学校等のカリキュラムをさらに分析し、授業の位置づけ、履修コースや学年といった学習環境の特徴をまとめることで、日本の高等学校等におけるスペイン語の授業の形態・傾向を提示する。

（本研究は JSPS 科研費 JP24K04035 の助成を受けたものです。）

10 月 4 日 (土) 【文学】① Sábado, 4 de octubre 【Literatura】①

ロルカの詩作品における舞踏の意味作用

La significación de la danza y el baile en la poesía de Federico García Lorca

小阪知弘 (Tomohiro KOSAKA)

本発表では、フェデリコ・ガルシア・ロルカ (Federico García Lorca: 1898-1936) が創作した詩作品 (Obras poéticas) に看取される舞踏の諸要素に着目して、分析を試みる。具体的には、『カンテ・ホンドの歌』(*Poema de Cante jondo*: 1921)、組曲集 (*Suites*: 1920-1927)、『ジプシー歌集』(*Romancero gitano*: 1924-1927)、『ニューヨークの詩人』(*Poeta en Nueva York*: 1930)そして、『ガリシアの六つの詩篇』(*Seis poemas galegos*: 1935) に散見される舞踏の場面と舞踏に纏わる詩的記述を取り上げながら、考察を展開させることにする。本発表では、ロルカが執筆した劇作品 (Obras teatrales) に見受けられる舞踏の場面には言及せず、詩作品に観察される舞踏の要素に限定して分析をおこなう。具体的な分析には、以下二つの方法論を用いることにする。第一に、J・G・フレイザー (Sir James George Frazer: 1854-1941) の著作である『金枝篇—呪術と宗教の研究』(*The Golden Bough. A Study in Magic and Religion*: 1890) の第一巻である『呪術と王の起源 (上)』(*The Magic Art and the Evolution of Kings*) で論じられている〈共感呪術〉とその位相を分析に適用させる。第二に、ノーベル文学賞作家 (1990 年受賞) であるオクタビオ・パス (Octavio Paz: 1914-1998) の著した『弓と豎琴』(*El arco y la lira*: 1956) において言及されている、舞踏とリズムの関係性と〈魔除け〉の意味作用も参照しながら、論述に着手する。

分析を進展させていくなかで、ロルカが詩作品に組み込んだ舞踏の種類を明らかにし、舞踏をめぐる主題をカテゴリー別に峻別する。そして最終的には、呪術的観点と律動的観点という両観点に立脚しながら、ロルカが詩作品に投入した舞踏の諸要素の意味作用を明らかにする。

10 月 4 日 (土) 【文学】② Sábado, 4 de octubre 【Literatura】②

«¡mal pecado!» —『よき愛の書』の教訓性を再評価する—
«¡mal pecado!» —para reevaluar el carácter didáctico del "Libro de buen amor"—

小川佳章 (Yoshinori OGAWA)

14 世紀前半にその大部分が書かれたと考えられる『よき愛の書』(*Libro de buen amor*) は、同時代のいかなる文学類型にも当てはまらない奇書である。第 16 連の読者に対する懇願や、第 1630 連の読者への挑戦を文字通りの意味に取った研究者たちは、難解で撞着に満ちた同書を合理的な教訓体系として解釈しようと努めてきた。そして当然の結果として、神の愛の実践としての貞潔の勧め、肉欲のあるいは愛への誘いという、相反する結論が導き出される事態となった。この流れを変えたのは、Anthony N. Zahareas の *The Art of Juan Ruiz* の発表 (1965 年) である。以降はアイロニーと多義性こそが本書の芸術的目的であり、作者は恋愛詩人であると同時にキリスト教的モラルの教師であることの可能性を示そうとしたという解釈が、暗黙の前提とされてきた。

本発表では、『よき愛の書』で 3 度繰り返される «¡mal pecado!» という表現に注目し、上記のような芸術的意図の更に背後にある、冷徹な教訓に迫りたい。たしかに «¡mal pecado!» が同時代に「残念なことだ」という意味で使われていたという事実は、多くの文学的/非文学的テクストの分析によって証明されている。しかし『よき愛の書』においては、その文字通りの意味、すなわち「悪しき罪」という語義を無視することは出来ない。なぜなら、3 つの用例のうち 2 つは罪を犯した登場人物の死と関係しており、いま 1 つは謝肉祭の王の四旬節の女王に対する敗北、つまり肉における死と、その帰結としての罪の悔い改めを語る場面だからだ。

10 月 4 日 (土) 【文学】③ Sábado, 4 de octubre 【Literatura】③

「善を以て悪を防げ」のお気に入り衣装

El disfraz del valido de *Cómo ha de usarse del bien y prevenirse el mal*

Francisco GÓMEZ MARTOS

Cómo ha de usarse del bien y prevenirse el mal (también conocida como *Los Guzmanes de Toral*) es una obra teatral comúnmente atribuida a Lope de Vega. Pertenece al género de “comedias de privanza”, que son representaciones dramáticas protagonizadas por un privado o valido, la persona de mayor confianza del rey. La interpretación más generalizada de *Cómo ha de usarse* sostiene que el protagonista de la obra, Payo de Guzmán, representa una imagen ideal de la figura del privado: honesto, humilde y generoso. No obstante, esta imagen teatral contrasta bastante con lo que ocurría en la política española de la época. Por ese motivo, los investigadores siempre han sospechado que *Cómo ha de usarse* contiene un elemento satírico. Se entiende que el contraste entre el modélico Payo y el duque de Lerma, valido de Felipe III en la época en que se escribió *Cómo ha de usarse*, es tan grande, que la obra podría verse como una crítica indirecta a la privanza de Lerma. Pero si *Cómo ha de usarse* critica la privanza en tiempos de Lerma, ¿verdaderamente la obra representa a un privado perfecto? ¿Por qué la crítica de la obra no alcanza la caracterización del privado protagonista? ¿No es posible que ese personaje sea menos perfecto de lo que se ha pensado? Este trabajo explora más ampliamente esa última línea de investigación y desarrolla el argumento según el cual Payo de Guzmán, en realidad, es un personaje maquiavélico que actúa con hipocresía y utiliza su indumentaria como disfraz para conseguir sus fines, que no son otros que convertirse en el hombre más poderoso del reino como privado del monarca y formar parte de la familia real mediante un doble matrimonio entre Payo y una prima del rey, Aldonza, y entre el rey Alfonso y la hermana de Payo, Greida. La conducta de Payo se corresponde así con algunas de las estrategias y los métodos que solían emplear los cortesanos a la hora de conseguir favores y competir por los puestos más elevados, desde cuidar la vestimenta y reducir a los rivales y enemigos hasta asumir una conducta camaleónica capaz de adaptarse a distintas circunstancias.

10 月 4 日 (土) 【文化】 ① Sábado, 4 de octubre 【Cultura】 ①

現代スペイン思想における道徳的「エゴイズム」—ウナムーノとサバテール—
El "egoísmo" en el pensamiento español actual —Unamuno y Savater—

松本健 (Ken MATSUMOTO)

本発表のテーマは「現代スペイン思想における道徳的エゴイズム——ウナムーノとサバテール——」である。本発表では、現代スペイン思想における 98 年の世代を代表する哲学者ウナムーノと 68 年の世代を代表するサバテールのそれぞれの思想におけるエゴイズムの概念について取り上げ、それが持つ道徳的側面がスピノザのコナトゥスの概念に基礎づいていることを示すことを目的とする。

このふたりの哲学者がひとつの研究の主題として取り扱われることはいまだ少ない。しかし、発表者は現代スペイン思想において「道徳的エゴイズム」をめぐるこの両者のつながりは思想史的にも無視できないものであり、それは今後研究される必要があると考えている。

なぜなら、ウナムーノに倣っていえば、この両者は「肉と骨の人間 (El hombre de carne y hueso)」の維持に努める努力 (欲望)¹としてスピノザのコナトゥスを考え、この自愛に基づくことによる他者への愛 (ウナムーノ) /道徳的な行為 (サバテール) を重要視し、そこからエゴイズム²を考えているからである。

ここで注意せねばならないのは、このふたりの哲学者が考えている「エゴイズム」とはわれわれが通常考える「自分さえよければよい」というような、排他的かつ敵対的な自己中心主義としての利己主義とは全く異なるという点である。むしろ彼らの思想におけるエゴイズムは、まさにカントが主張していたが、他者を目的それ自体として扱うことを成立させる基盤なのである。というのも、コナトゥスから具体的個人としての我々の存在の維持と発展に必要なことが由来するのだが、ウナムーノとサバテールが目指す人間的かつ具体的個人のわたしの維持ために最も必要であるのが「他者の存在」であるからだ。

¹ 『エチカ』第三部定理九備考にてコナトゥスは cupiditas (欲望) とも考えられている。

² ウナムーノ自身はエゴイズム(egoísmo)ではなくエゴティズム(egotismo)であるとしているが、主張せんとする文脈はサバテールと一致しているため、本発表ではエゴイズムの語を採用する。

10 月 4 日 (土) 【文化】② Sábado, 4 de octubre 【Cultura】②

バルセロナの歌：シンボルのレパートリー

Las canciones de Barcelona: un repertorio de símbolos

Fernando RAMOS ARROYO

En esta ponencia nos proponemos realizar un análisis de la ciudad de Barcelona desde un punto de vista simbólico, mostrando cómo los intercambios de símbolos que se han ido produciendo a través de una manifestación artística concreta (en este caso, la música popular), han ido configurando diferentes representaciones de esta ciudad a lo largo del tiempo y del espacio.

Varios estudios sobre semiótica urbana, como los realizados por Barthes o Lynch, señalan la necesidad de incorporar el análisis de los símbolos si queremos comprender los espacios urbanos con un mayor grado de profundidad. Por otro lado, el arte contemporáneo está unido de una manera decisiva a las ciudades, tanto en sus procesos de producción y consumo, como en el uso que los artistas hacen de estas para dar forma a sus artefactos. Y las canciones, al igual que otros medios de expresión artística, van configurando una serie de representaciones del espacio urbano, en un proceso bidireccional: la ciudad es el lugar donde las canciones nacen y, por otro lado, la ciudad se va transformando por la construcción de significados que la interacción social produce, en aquello que Blumer llamó “interaccionismo simbólico”. Estos elementos, asimismo, entroncan con la idea de cultura como atribución de significados elaborada por investigadores como el antropólogo Clifford Geertz.

A partir de estas premisas, en nuestra ponencia iremos viendo cómo los símbolos y significados compartidos que aparecen en los textos de las canciones se van instalando en los grupos y personas que viven en los lugares donde estos se producen, pero también, de forma muy potente, en colectivos e individuos que viven en otros lugares.

Para observar este fenómeno y conseguir el objetivo planteado en la ponencia partiremos del análisis de las letras de cincuenta canciones de música popular contemporánea que tienen a Barcelona como protagonista.

10 月 4 日 (土) 【文化】 ③ Sábado, 4 de octubre 【Cultura】 ③

**Tokkatsu-プロジェクト特別活動における教育的イノベーションと異文化交流：教育
教材『Manga-1』**

**Innovación didáctica e intercambio intercultural en las actividades especiales del
proyecto Tokkatsu: el material educativo *Manga-1***

Jakeline LAGONES

El presente estudio expone una propuesta educativa innovadora que articula el modelo de aula invertida con el desarrollo de la competencia intercultural, en el marco del proyecto *Tokkatsu* (Educación de Actividades Especiales), adaptado al contexto universitario japonés. El núcleo de la propuesta es *Manga-1*, un material didáctico gratuito diseñado y financiado como parte del proyecto *Tokkatsu*, lo que permite su libre distribución entre docentes y estudiantes. *Manga-1* está orientado al aprendizaje del español como lengua extranjera (ELE) en el nivel A1 del Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas (MCER) y responde a la necesidad de recursos que fomenten el aprendizaje autónomo y cooperativo, al tiempo que fortalezcan la competencia comunicativa y las habilidades interculturales mediante interacciones auténticas con hablantes nativos.

El material está conformado por tareas que incluyen diálogos ilustrados al estilo manga, culturalmente atractivos y cercanos para el estudiantado japonés, acompañados de recursos auditivos grabados por docentes y hablantes nativos que refuerzan la comprensión oral, la pronunciación y la entonación. Su diseño, basado en los principios de la enseñanza comunicativa y el aprendizaje por tareas, se integra en un entorno de aula invertida, en el que los estudiantes trabajan los contenidos de forma autónoma fuera del aula y emplean el tiempo presencial en actividades cooperativas e interacciones significativas. Esta propuesta se complementa con el programa de intercambio virtual *Amigo-Tomodachi*, también financiado por *Tokkatsu*, que posibilita interacciones en tiempo real entre estudiantes japoneses y estudiantes de América Latina, fomentando la competencia intercultural y la conciencia global.

El objetivo del estudio es analizar el impacto de *Manga-1* y del programa de intercambio en la motivación del alumnado, el desarrollo de sus habilidades comunicativas orales y su capacidad para interactuar en contextos interculturales, en el marco de las actividades voluntarias del proyecto *Tokkatsu*. Se espera que los resultados proporcionen evidencia sobre los beneficios de integrar materiales gratuitos y contextualizados en modelos de

aula invertida, así como sobre el potencial del intercambio virtual para enriquecer la enseñanza de lenguas extranjeras y potenciar la participación de estudiantes latinoamericanos en el proyecto *Tokkatsu*. Asimismo, se plantea que el diseño flexible de *Manga-1* sirva como modelo replicable para la enseñanza de otras lenguas en diversos contextos educativos.

Palabras clave: aula invertida, español como lengua extranjera, materiales didácticos gratuitos, aprendizaje cooperativo, habilidades de comunicación oral, competencia intercultural

10 月 4 日（土）【文化】④ Sábado, 4 de octubre 【Cultura】④

日本におけるヒスパニック文学カノンの移動 — 受容・教育・再解釈
El canon literario hispánico en tránsito: recepción, enseñanza y reescritura en Japón

Antonia María MORA-LUNA

Esta comunicación propone analizar la presencia del canon literario hispánico en el contexto japonés, atendiendo a sus formas de circulación, apropiación y resignificación en los ámbitos académico y cultural. El estudio se enmarca en una línea de investigación centrada en la historia de la educación literaria y se desarrolla desde una perspectiva transnacional e intercultural, con especial atención al papel de la literatura en la construcción identitaria y en los procesos de mediación cultural.

Nos interesa indagar qué autores y obras del canon hispánico —incluidas aquellas escritas en las diversas lenguas del Estado español— han sido traducidos, enseñados o leídos en Japón, y cómo estos textos han sido incorporados —o excluidos— de la cultura académica, los planes de estudio, los programas universitarios y las prácticas lectoras. A través del análisis de materiales didácticos, políticas editoriales y testimonios docentes, se busca comprender el lugar simbólico que ocupa la literatura hispánica en la formación de imaginarios culturales en Japón, así como los criterios que orientan su selección, traducción y enseñanza.

Esta propuesta se inscribe en el marco de una estancia de investigación en la Universidad de Kioto, donde se está desarrollando este proyecto en curso. La participación en este congreso tiene como finalidad no solo presentar los objetivos iniciales de la investigación, sino también establecer vínculos de colaboración con docentes e investigadores japoneses especializados en estudios hispánicos, cuyas experiencias, materiales y valoraciones serán fundamentales para enriquecer el análisis.

Asimismo, este estudio ofrece una oportunidad singular para examinar la imagen y representación de la cultura hispánica desde fuera, a través de la mirada proyectada desde una realidad tan específica y distante como la japonesa. Esta perspectiva externa permitirá repensar críticamente los procesos mediante los cuales el canon literario hispánico es traducido, reinterpretado y reinscrito en otros contextos educativos y culturales.

10 月 5 日 (日) 【言語 I】① Domingo, 5 de octubre 【Lingüística I】①

大規模言語モデルはスペイン語の地理的語彙変異を理解しているか？
¿Los grandes modelos de lenguaje están enterados de la variación léxica del español?

川崎義史 (Yoshifumi KAWASAKI)

本研究では、大規模言語モデル (Large Language Models; LLM) がスペイン語の地理的語彙変異をどの程度理解しているか、また、LLM がどのような方言的バイアスを有しているか明らかにすることを目指す。今後、LLM が生成する言語データは飛躍的に増加していくことが予想される。従来のマスメディアやインターネットに加え、LLM が言語規範に与える影響も無視できなくなっていくであろう。例えば、LLM が特定のスペイン語方言のみを使用するのであれば、その方言の特徴はスペイン語圏全体に拡散されていく可能性がある。しかし、特定の方言の影響力の伸長は、スペイン語の方言的多様性の喪失につながり得る。LLM 内の方言的多様性の確保は、重要な技術的課題の一つである。

そこで、まずは、LLM が有するスペイン語の方言的知識を把握することが必要となる。先行研究 (Mayor-Rocher et al. 2025) も存在するが、調査項目が語彙と形態統語論に関する 30 項目にとどまっている。それに対し、本発表では、語彙変異に限定しつつも、数百程度の項目に及ぶ大規模な調査を実施する。調査項目は、VARILEX (Variación léxica del español en el mundo) から選定する。アンケート調査を模し、LLM をインフォーマントと見立て、プロンプトによる択一式問題の形式で調査を実施する。例えば、各地のスペイン語において *vehículo destinado al transporte de personas* を何と言うか、*auto*, *carro*, *coche* などの選択肢から回答させる。理解度は、問題の正答率で評価する。地域や語彙の種類に応じて正答率がどのような分布を示すか分析し、スペイン語の地理的語彙変異に関する LLM の理解度を検証する。

10 月 5 日 (日) 【言語 I】② Domingo, 5 de octubre 【Lingüística I】②

コーパス中の事例選別を支援する AI 構築の試み
—現代スペイン語のセミコピュラ動詞 *ir* と *salir* を事例として—

Propuesta de construcción de una IA para apoyar la selección de ejemplos en corpus
—El caso de los verbos semicopulativos *ir* y *salir* en el español contemporáneo—

小林純一郎 (Junichiro KOBAYASHI)

村井勇輝 (Yuki MURAI)

コーパスを用いた研究では、特定の文字列パターンや、特定の品詞との共起などを検索する手法が広く用いられている。しかし、この方法は、必ずしも研究者個々の問題意識に即した例文を過不足なく抽出できるとは限らない。例えば、現代スペイン語の動詞 *ir* と *salir* が文において主語と属辞とを結びつけるセミコピュラ動詞としての用例をコーパスから抽出することを考える。品詞との共起だけを条件としたコーパス検索では、(1ab)のような脱意味化によって移動の意味を失ったセミコピュラ動詞としての用例と、(2ab)のような主語の物理的な移動を意味する本動詞としての用例とを区別することができない。

- (1) a. Los trabajos deben ir acompañados de una ficha técnica y datos o documentos de interés, y deben enviarse antes del 30 de septiembre [...].
b. Este seguro de vida que se ha buscado le ha salido carísimo.
- (2) a. El más chico de mis tíos y yo íbamos juntos a la escuela.
b. Éramos cien hombres aproximadamente. Al levantarnos había que llevarnos al servicio. El guardia abría la primera celda y salíamos todos juntos al tanque donde depositaban el agua. Únicamente podíamos lavarnos la cara.

(全て CREA より、下線は発表者による)

そこで本発表では、この課題に対し半教師あり学習 (Zhou *et al.* 2004) 及び転移学習 (Sun *et al.* 2019) と呼ばれる手法によって「研究者固有の問題意識・判断傾向」に寄り添う分類モデルを構築し、事例収集作業を支援するアプローチを提案する。BERT と呼ばれる人工知能を土台とし「コピュラ的か否か」のラベルが予めわかっている 60 個の事例を元手に、未知の 700 個のデータの自動判別の学習を行った。その後、別途用意していたラベル済み事例 40 個で性能を評価した。

性能評価事例に対しての振る舞いを比較した結果、既存の構文解析ツールを利用し

たベースの手法よりも高い精度での分類に成功した。

また、分類過程において、モデルが判断に迷った例に着目することで、従来見落とされていたような移動を表すか否かが曖昧な文法化の途上にあると思われる用例も発見された。本発表ではこのような事例に関して文法化の段階に関する理論を参照しつつ(Heine *et al.* 1991) 議論する。

(3) Suele ir descalzo o con «caites», del estilo zinacanteco, en las fiestas.

(CREA より、下線は発表者による)

このように本発表では構築した AI が研究補助ツールの役割を担うだけでなく、言語学的な側面においても新たな知見を提供するのに有益であることを報告する。

参考文献

- Heine, B., Claudi U. & Hünemeyer, F. (1991) *Grammaticalization: a conceptual framework*, University of Chicago Press.
- REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos (CREA Anotado) [en línea]. *Corpus de referencia del español actual* (CREA). <http://www.rae.es> [Fecha de consulta: 23/06/2025].
- Sun, C., Qiu, X., Xu, Y., & Huang, X. (2019). How to fine-tune BERT for text classification? In *China National Conference on Chinese Computational Linguistics* (pp. 194–206). Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-030-32381-3_16
- Zhou, D., Bousquet, O., Lal, T. N., Weston, J., & Schölkopf, B. (2004). Learning with local and global consistency. In *Advances in Neural Information Processing Systems* (Vol. 16). MIT Press.
https://proceedings.neurips.cc/paper_files/paper/2003/file/87682805257e619d49b8e0dfdc14affa-Paper.pdf

10 月 5 日 (日) 【言語 I】③ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística I】③

クラスター分析とコレスポネンス分析を用いた現代スペイン語のコピュラ動詞
estar と類似セミコピュラ動詞の分類

Clasificación del verbo copulativo *estar* y de los pseudocopulativos semejantes en el español contemporáneo a través del análisis de conglomerados y del análisis de correspondencias

村井勇輝 (Yuki MURAI)

本研究では、現代スペイン語におけるコピュラ動詞 *estar* と、それに類似するセミコピュラ動詞 *encontrarse*, *hallarse*, *ir*, *venir*, *andar* を対象として、共起する属辞形容詞の観点から、それぞれの類似度や各動詞のふるまいの違いを記述することを目的とする。これらの動詞は、以下のように、文において主語と属辞とを結びつけるコピュラ動詞としての用法を持つ。

(1)

- | | |
|---|---|
| a. Estoy contento. | (宮城・山田 (監修) 1999, s.v. <i>estar</i>) |
| b. Me encuentro mejor. | (宮城・山田 (監修) 1999, s.v. <i>encontrarse</i>) |
| c. Dicen que se halla enfermo. | (宮城・山田 (監修) 1999, s.v. <i>hallarse</i>) |
| d. Últimamente va muy guapa. | (高垣 (監修) 2007, s.v. <i>ir</i>) |
| e. El número de representantes viene dado por el porcentaje de votos. | (高垣 (監修) 2007, s.v. <i>venir</i>) |
| f. Anda muy ocupada. | (宮城・山田 (監修) 1999, s.v. <i>andar</i>) |

先行研究では、*encontrarse*, *hallarse*, *ir*, *venir*, *andar* は文法化・脱意味化の影響で本動詞としての意味を失い、それぞれが *estar* に似たふるまいをすることが指摘されてきた (Butt *et al.* 2019, Tsutahara 2022, RAE y ASALE 2025, DLE)。しかし、個別の動詞と *estar* との違いに着目した記述に留まっており、複数の類義語を考慮に入れた体系的な記述が未だなされていないと思われる。また、上記の *estar* 以外の動詞はセミコピュラ動詞として一律に分類がなされてきた (Morimoto y Pavón Lucero 2007, RAE y ASALE 2025)。しかしながら、セミコピュラ動詞とされる各動詞の間でも文法化・脱意味化の度合いには差があると思われる。

そこで本研究では、まず、現代スペイン語の大規模コーパスである Spanish Web 2023 (Kilgarriff y Renau 2013) を用いて、各動詞が取る属辞形容詞とその頻度を抽出した。そのうえで、複数の変数を似たグループに分類するクラスター分析と、多変量間の情報を要約して対応関係を可視化するコレスポネンス分析を行い *estar* に類似するとされるセミコピュラ動詞の中でも、どの動詞がより *estar* と類似するのかを調査した。これにより、各動詞が取る属辞形容詞の傾向の違いを体系的に記述すると共に、セミコピュラ動詞の中でもその文法化・脱意味化の度合いに応じて、定量的に、より細分化した分類が記述できることを示す。

参考文献

- Butt, J, C. Benjamin y A. Moreira Rodríguez (2019) *A New Reference Grammar of Modern Spanish sixth edition*, London; New York: Routledge.
- Morimoto, Y. y M. V. Pavón Lucero (2007) *Los verbos pseudo-copulativos del español*, Madrid: Arco Libros.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2025) *Nueva gramática de la lengua española Sintaxis (III) Edición revisada y ampliada*, Madrid: Espasa.
- Real Academia Española: Diccionario de la lengua española, 23.^a ed., [versión 23.8 en línea]. <https://dle.rae.es> [Fecha de la consulta: 27/06/2025].
- Tsutahara, R. (2022) “Desemantización verbal desde la perspectiva de la enseñanza de ELE” *RILEX5* (1) pp.119-147.

用例出典・コーパス

- Kilgariff, A. y I., Renau (2013). esTenTen, a vast web corpus of Peninsular and American Spanish. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, (95) pp.12-19.
- 宮城昇・山田善郎 (監修) (1999) 『現代スペイン語辞典 改訂版』, 白水社.
- 高垣敏博 (監修) (2007) 『西和中辞典 第 2 版』, 小学館.

10 月 5 日 (日) 【言語 I】④ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística I】④

日本におけるスペイン語の言語景観をめぐる交流の場としてのソーシャルメディア
Las redes sociales como lugar de intercambio en torno al paisaje lingüístico del español en Japón

Federico Francisco PÉREZ GARRIDO

Dado el carácter cambiante y efímero del paisaje lingüístico (en adelante, PL) de cualquier entorno urbano, y ante la imposibilidad de recorrer de forma individual y empírica los 2.194 km² que conforman el área metropolitana de Tokio, para investigar en profundidad el PL en español de esta ciudad se hace imprescindible ampliar el grupo de trabajo. Esto permitiría extender el área de recogida de datos e incluso alcanzar una cobertura que abarque la totalidad del territorio japonés.

El proyecto sobre el PL de Tokio forma parte de una investigación doctoral y tiene como base un estudio de carácter tanto cuantitativo como cualitativo. Por un lado, se analiza la presencia y fuerza del español en comparación con otras lenguas a partir del número de imágenes recogidas, introduciendo variables como la zona geográfica, el objetivo comunicativo, el sector comercial o institucional, entre otras. Por otro, se lleva a cabo un análisis cualitativo que considera elementos como la intención del mensaje, sus posibles emisores y receptores, el prestigio percibido del uso del español, así como aspectos históricos y sociolingüísticos asociados a cada signo.

Al no contar con otros investigadores, más allá del propio autor, se ha considerado necesario diseñar e implementar una serie de iniciativas que permitan a la comunidad hispanohablante —ya sea residente o visitante— colaborar en la localización, identificación y difusión de mensajes y signos en español presentes en el PL.

En este contexto, las nuevas plataformas digitales se convierten en herramientas fundamentales para articular una red colaborativa. Funcionan como canales de intercomunicación entre usuarios del español —tanto nativos como estudiantes de ELE— que permiten nutrir esta investigación con testimonios visuales directos del PL en múltiples localidades, muchas de las cuales serían inaccesibles para un solo investigador.

No obstante, esto plantea una serie de interrogantes: ¿cómo organizar este trabajo colaborativo? ¿Qué criterios metodológicos deben aplicarse para validar una contribución? ¿Qué redes sociales resultan más eficaces? ¿Qué desafíos implica este enfoque? ¿Superan las ventajas a las dificultades?

En esta ponencia se presentará el proceso que el autor ha seguido para trasladar su investigación al ámbito digital y a la comunidad hispana. Asimismo, se compartirán reflexiones, expectativas y logros alcanzados hasta la fecha, con el objetivo de abrir el diálogo con los asistentes e inspirar nuevas formas de participación colaborativa en el estudio del PL.

10 月 5 日 (日) 【言語 I】⑤ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística I】⑤

「私たちは皆裸で生まれる」：衣服に関するスペインのことわざに見る集団的アイ
デンティティの表象

***Todos desnudos nacemos: Refranes sobre vestimenta como reflejo de la identidad
colectiva en el imaginario español***

Mónica PÉREZ RUIZ

En esta ponencia propongo un análisis sociolingüístico y cultural de un corpus de cien refranes relacionados con la vestimenta, organizados en torno a seis grandes categorías: (1) identidad y percepción social, (2) comodidad y adaptabilidad, (3) calidad y durabilidad, (4) mantenimiento y cuidado, (5) sabiduría práctica y experiencia, y (6) modestia y discreción.

Partiendo de la hipótesis de que los refranes sobre vestimenta actúan como cápsulas de conocimiento cultural, esta investigación se inscribe en la intersección entre la sociolingüística, la antropología cultural y los estudios paremiológicos. El objetivo principal es averiguar cómo estos enunciados breves y aparentemente simples transmiten representaciones sociales complejas sobre el cuerpo, la jerarquía, el consumo, la moralidad y la autenticidad, todo ello desde una perspectiva situada en el contexto de la sociedad española.

A lo largo de la ponencia, se prestará especial atención al léxico específico de la indumentaria (términos como *jubón*, *sayo*, *albarca* y *ramplón*, entre otros), entendido no solo como parte del vocabulario tradicional, sino también como un medio para recuperar elementos de la cultura material que, de otro modo, podrían caer en el olvido. Asimismo, se examinará el uso de imágenes metafóricas que permiten proyectar valores éticos y sociales en el cuerpo vestido.

Del mismo modo, se reflexionará sobre la vigencia de parte de estos refranes en la actualidad, su potencial didáctico en contextos de enseñanza del español como lengua extranjera, y su valor como documento etnográfico capaz de revelar dinámicas de poder, modelos de conducta y mecanismos de control social.

Esta ponencia también servirá como punto de partida para desarrollar futuras investigaciones comparativas con refranes de otras culturas, como la japonesa, donde la vestimenta ha desempeñado tradicionalmente un papel clave como marcador de estatus, virtud y pertenencia. En definitiva, se reivindicará el valor de la paremiología como una

vía de acceso a los imaginarios culturales y como herramienta clave para entender las estructuras simbólicas que organizan la vida cotidiana.

10 月 5 日 (日) 【言語 II】① Domingo, 5 de octubre 【Lingüística II】①

理解プロセスに基づく語用論的機能の比較：¿sabes?, ¿entiendes?, ¿ves? の場合

**Comparación de las funciones pragmáticas basadas en el proceso de
comprensión: el caso de ¿sabes?, ¿entiendes? y ¿ves?**

野村明衣 (Mei NOMURA)

¿sabes?, ¿entiendes?, ¿ves? は、Fuentes Rodríguez (1990) によれば呼びかけ表現 (apelativos) であり、Ortega Olívares (1986) はこれらを「正当化の補足表現 (apéndices justificativos)」に分類している。Martín Zorraquino y Portolés Lázaro (1999) は、これら 3 表現の脱意味化 (desematización) を指摘し、話し手が情報伝達の際に聞き手がその情報や発話の根拠を知らないと思われ、発話を正当化するために用いると述べている。

しかし、これらの表現は本来の語彙的意味に依拠して、聞き手への理解要求や話し手による正当化のプロセスにおいて異なる機能を果たしていると考えられる。Nomura (2024) では、¿entiendes? と ¿comprendes? に焦点を当て、語彙的意味と共起する直接目的語の比較から、聞き手に対する理解要求の語用論的差を論じ、¿entiendes? は発話内容に加え、その背後にある発話の動機への理解を求めると結論づけた。また、Nomura (査読中) では ¿ves? と mira を比較した。視覚に関わるこの 2 つの呼びかけ表現は、受動的知覚と能動的知覚という語彙的意味によって疑問形式と命令形式で使用され、知覚対象を知覚したかを問う、あるいは能動的に知覚するよう求めることによって副次的に理解要求の機能を果たす。さらに、Nomura (査読中) では、Gallardo y Marín (2005) が指摘した ¿ves? と ¿entiendes? の言い換えの可能性について、語彙的意味を通して考察した。ves? が理解プロセスの初期段階 (知覚) を、¿entiendes? が最終段階 (思考的処理を経た理解) を指すことから、前者から後者への言い換えは文脈次第で可能である一方、逆は困難であることを明らかにした。

以上のように、理解要求表現の語用論的機能は語彙的意味に基づいて段階的に構造化されることが考えられる。本発表では、これに ¿sabes? を加え、¿entiendes?, ¿ves? との比較を通してその機能を考察し、理解のプロセスにおける 3 表現の役割を明確化することを目的とする。¿sabes? に関しては先行研究が多く存在するものの、語彙的意味に立脚してその語用論的機能を体系的に分析したものは見られない。本発表は、これらの表現の比較によって、スペイン語における理解要求表現の語用論的機能の体系化を試みる。

参考文献

- Fuentes Rodríguez, Catalina. “Apéndices con valor apelativo”, *Sociolingüística andaluza*, Universidad de Sevilla, Sevilla, 1990, 5, p. 171-196.
- Gallardo Paúls, Beatriz y Marín, María-Josep. “Marcadores discursivos procedentes de verbos perceptivos en el discurso afásico”, *Revista de investigación Lingüística*, Servicio de Publicaciones, Universidad de Murcia, 2005, 8, p. 53-94.
- Martín Zorraquino, María Antonia y José Portolés Lázaro. “Los marcadores del discurso”, *Gramática descriptiva de la lengua española*, Espasa Calpe, Madrid, 1999, vol.3, p. 4051-4213.
- Nomura, Mei. “Diferencias en la función pragmática de ¿entiendes? y ¿comprendes?: con especial atención a su significado léxico”, *Hispanica*. Asociación Japonesa de Hispanistas, Tokio, 2024, 68, p.51-78.
- Nomura, Mei. (en revisión) “Análisis pragmático de ¿ves? y mira: correspondencias y diferencias”
- Nomura, Mei. (en revisión) “Posibilidad de alternancia de ¿ves? y ¿entiendes?: Andalusia pragmático en su uso a través de significado léxico”
- Ortega Olivares, Jenaro. “Aproximación al mecanismo de la conversación: Apéndices justificativos”, *Verba*, Universidad de Santiago de Compostela, Santiago de Compostela, 1986, 13, p. 269-290.

10 月 5 日 (日) 【言語 II】② Domingo, 5 de octubre 【Lingüística II】②

スペイン語結果構文 一周辺的構文を中心にー
**Estructuras Consecutivas del español: con especial atención a las Estructuras
Periféricas**

仲井邦佳 (Kuniyoshi NAKAI)

スペイン語の結果構文は、比較構文とともに相関構文の下位カテゴリーであるが、現在でも研究が必ずしも十分ではない文法形式であろう。伝統的には、等位の結果構文と従位の結果構文に二分して記述・分析がされてきた (*Esbozo* 1973, *GDLE* 1999, etc.)。

Pienso *luego* existo.

Juan es *tan* alto *que* llega al techo.

しかし、これらは同じ構文として扱うにはあまりにも意味的、構造的違いが大きい。アカデミアは *NGLE* (2009) でようやく前者の等位構文を結果構文から除外するに至った。しかし、*NGLE* (2009) は依然として、以下のような構文を結果構文として扱っている (第 45 章「比較構文・最上級構文・結果構文」)。

No soy *tan* estúpida *como* para no saberlo.

Se quedó dormido *de lo* cansado *que* estaba.

本来の結果構文は、より狭く相関構文 (Juan es *tan* alto *que* llega al techo), すなわち相関構造 (*tan(to)...**que*, *tal...**que*, etc.) を有するものに限定すべきである。

ただ、相関詞を欠いた以下のような構文を結果構文とみなすべきかどうかは議論の余地がある (cfr. *GDLE* 1999, *NGLE* 2009, etc.)。

Cuenta cada chiste *que* te partes.

¡Quién habrá venido, *que* hay tanta policía!

本発表では、これら第 1 相関詞を欠いた構文 (Ø...*que*) を (典型的ではないが) 周辺的な準相関結果構文 (Estructura Consecutiva Cuasi-Correlativa) と位置づけ、その特徴を記述・分析する。準相関結果構文は、省略結果構文 (Estructura Consecutiva Elíptica) と代替結果構文 (Estructura Consecutiva Alternativa) からなる。

10 月 5 日 (日) 【言語 II】③ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística II】③

"Lo + 形容詞 + ser + que" 構文の非構成的特徴
Rasgos no composicionales de "Lo + adjetivo + ser + que"

蔦原亮 (Ryo TSUTAHARA)

“Lo + 形容詞 + ser + que (ej. Lo bueno es que tienen su propia casa.)” は様々なレジスターで用いられる構文である (以下 LOASQ とする)。その使用頻度の高さから、LOASQ を扱った先行研究は多数存在し、その多くは LOASQ の統語的性質に焦点を当てるものであった。本研究はそれらを踏まえ、LOASQ の非構成的特徴を考察するものである。ここでいう非構成性とは、語や句の構成要素から予測できない性質を指す。一般に使用頻度の高い語句ほどこの性質を帯びやすく、LOASQ もなんらかの非構成性を有している可能性がある。この問題意識に基づき、コーパスを用いた調査を行った。本発表では、LOASQ の非構成性について以下の点を報告し、重点的に論じる。

- LOASQ には形式上さまざまな形容詞が生起可能と予測される。しかし分析によれば、LOASQ に現れる形容詞の種類は確かに多岐にわたっていたものの、ごく少数の特定の形容詞 (cierto, mejor, importante, peor, normal など) が著しく高頻度で用いられていた。上位 10 語の合計出現頻度は、コーパス中の全 LOASQ 用例の 85% を超える。このことから、LOASQ の実際の使用は特定の用途に偏っており、この偏りは構成要素からは予測できないため、形式的・使用上の非構成性と見なせる。
- なかでも cierto の出現頻度は群を抜いて高く、LOASQ の全用例の 47% が lo cierto es que である。このことからこの句は LOASQ の典型性を反映している可能性が高く、通時・共時の両面から重点的に分析を行った。その結果、lo cierto es que には意味・語用論上の非構成性があり (単に「確かなこと」ではなく、「前提となる発話内容に反する」という含意を持つ)、また近世以前から他の LOASQ より高頻度で使用されていたことが確認された。この意味・語用論上の非構成性は現代におけるそれ以外の形容詞による LOASQ にも広く見られ、この構文は lo cierto es que を中心・モデルとしながら生産性を高めてきたと考えられる。

10 月 5 日 (日) 【言語 II】④ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística II】④

存在論ならびに認識論の観点からみたスペイン語の接続法の基礎的な機能
La función básica del modo subjuntivo en español desde la perspectiva ontológica y epistemológica

森本匡紀 (Masaki MORIMOTO)

本発表では、存在論ならびに認識論の観点から設定しうるスペイン語の接続法の基礎的な機能について、発表者による検討の結果を報告する。なお、接続法の使用のうちに観取されうる意義に関しては、多様な立場から複数の提案がおこなわれてきた。発表者の研究では、主に一元論の立場からの再検討をおこなう。

発表の流れとして、はじめに、一元論的立場に依拠する従来の先行研究が直説法との対比のもとで提案してきた接続法の意味的働き¹を 3 つに大別して紹介し、それらの問題点ないしは改善点の考察を簡潔におこなう。続いて、存在論ならびに認識論の観点による先駆的研究として、独自の超越論的立場から接続法の機能を論じた Hummel (2004)を導入し、当の理論の批判的検討を通して、同研究に残された課題を示す。最後に、先に述べた接続法の意味的働きの分立の解消、ならびに Hummel (2004)における課題の克服をともに可能とする接続法の基礎的な機能について、西洋哲学における存在論ならびに認識論の観点から提案を試みる。

本発表における暫定的な結論として、接続法は、現象学的な主体が空想ならびにそれに類する経験のもとで対象を〈疑似時間〉²へと内属させることの言語形式上の指標であり、この〈疑似時間〉において、対象の存在は経験主体によって問題視されることがない。この「存在の等閑視」については、アンリ・ベルクソンによる「持続」³、ならびにジャック・ラカンによる「現実界」⁴の概念を補助線とすることで、「主客未分離の状態における存在了解」として理解することが可能となる。換言すれば、接続法は、話者の意識が対象となる事象の観念に深く嵌入し、前者がなくては後者が存在しえないような、相即不離の関係にあることを示すと考えられる。

¹ 「意味的働き」の語は福畠 2019:12 より引用。

² 〈疑似時間〉の語は谷 (1998)より引用。

³ 「持続」の語は檜垣 (2022)より引用。

⁴ 「現実界」の語は松本 (2015)ならびに向井 (2016)より引用。

参考文献

- 谷徹 (1998) 『意識の自然 現象学の可能性を拓く』 勁草書房
檜垣立哉 (2022) 『ベルクソンの哲学 生成する実在の肯定』 講談社
松本卓也 (2015) 『人はみな妄想する ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』 青土社
向井雅明 (2016) 『ラカン入門』 筑摩書房

Hummel, Martin (2004) *El valor básico del subjuntivo español y románico*, Cáceres:
Universidad de Extremadura. Servicio de Publicaciones.

10 月 5 日 (日) 【言語 II】⑤ Domingo, 5 de octubre 【Lingüística II】⑤

**RAE-ASALE (2025) *Nueva gramática de la lengua española* 第 2 版の特徴について
Reseña de la segunda edición de *Nueva gramática de la lengua española* de RAE-
ASALE, 2025**

福嶋教隆 (Noritaka FUKUSHIMA)

本年、スペイン王立学士院 (Real Academia Española、以下 RAE と略記) とスペイン語学士院連盟 (Asociación de Academias de la Lengua Española、以下 ASALE と略記) が『スペイン語新文法』(*Nueva gramática de la lengua española*) 第 2 版 (edición revisada y aumentada) を上梓し、6 月 12 日に RAE にて上梓発表会を開催した。

1999 年に出版された同書の初版は 2 巻、3886 ページだったが、26 年を経て世に出た第 2 版には新たに紙幅が費やされ、3 巻、4816 ページの大著となっている。

全体の統括は初版と同じく Ignacio Bosque Muñoz 博士である。編集には多くの人が携わっているが、特に Cristina Sánchez López 博士が大きな貢献をしたと聞く。

本発表では、初版と比較しつつ第 2 版の特徴について考察し、近年のスペイン語学の様相の一端を探ってみたい。とりわけ第 1 に、第 25 章「動詞 3. 叙法」(El verbo (III). El modo) の内容が、初版と第 2 版とでどう変わったか、第 2 に、各章末に新たに付された参考文献一覧から何を読み取れるかを扱う。

文献

RAE-ASALE. *Nueva gramática de la lengua española*. (Vol. 1. Morfología/Sintaxis I, Vol. 2. Sintaxis II). Madrid: Espasa Libros. 2009 (Primera edición).

RAE-ASALE. *Nueva gramática de la lengua española. Fonética y fonología*. Barcelona: Espasa Libros. 2011.

RAE-ASALE. *Nueva gramática de la lengua española*. (Vol 1. Morfología/Sintaxis I, Vol.2. Sintaxis II, Vol. 3. Sintaxis III). Barcelona: Planeta. 2025 (Edición revisada y aumentada).

寺崎英樹. 「書評: RAE, *Nueva gramática de la lengua española*」、『スペイン語学研究』26, pp. 201-208、東京スペイン語学研究会、2011.

関西スペイン語学研究会・編. 『『スペイン語記述文法』(1999)、『スペイン語新文法 (2009)』章別和文要約 5』、同研究会、2011.

_____. 『『スペイン語記述文法』(1999)、『スペイン語新文法 (2009)』、『スペイン語

新文法 音声学・音韻論』(2011) 章別和文要約 6』、同研究会、2015.

10 月 5 日 (日) 【文学】① Domingo, 5 de octubre 【Literatura】①

マヌエル・デ・ペドロロの諸作品とフランコ体制下の検閲 —「イソップの言葉」
の観点から読む

**La vigencia crítica del «lenguaje esópico» al leer a Manuel de Pedrolo frente a la
censura franquista**

田坂建太 (Kenta TASAKA)

マヌエル・デ・ペドロロ Manuel de Pedrolo は、フランコ体制期から民主化後の時代に活躍したカタルーニャ語作家である。生涯に 120 以上の作品を著した多作の作家であると同時に、フランコ体制による検閲の影響を強く受けたことでも知られる。ペドロロと検閲の関係についてはこれまで、出版社や検閲官による介入の実態に注目した研究や、検閲の困難に抗って自らの信条を貫く作家像を描き出す試みなどがなされてきた。

本報告は、ペドロロの作品が検閲を回避してメッセージを伝達しようとする手法について論じるために、スペイン以上に長く厳しい検閲下にあったロシアの文学に関して言及される「イソップの言葉 Aesopian Language」に着目する。とりわけ、その特性を体系的に論じた Lev Loseff の *On the Beneficence of Censorship* (1984 [Jane Bobko, Trans.], Sagner) を参照し、「イソップの言葉」の観点からペドロロを読むことの有効性を示す。

Loseff は、体制に不都合な内容やタブーを仄めかす「イソップの言葉」と称される種々の表現を、カモフラージュとなる「地(背景) screen」の部分と、仄めかしの存在を示す「標識 marker」の機能に着目して整理する。ペドロロの小説 *Totes les bèsties de càrrega* (執筆 1965/出版 67) と *Acte de violència* (1961/75) は、いずれも登場人物による権威主義体制への抵抗を描く類似した作品だが、前者は後者に比べ、言葉の多義性や間テクスト的性質を利用した諷刺表現に富む。「イソップの言葉」の概念を導入することで、こうした表現と検閲との関係を詳細に分析できるようになる。

また、ペドロロの作品群は、複数のジャンルでカタルーニャ語現代文学における先駆的な作品を含んでいるが、Loseff は、様々な文学ジャンルが「イソップの言葉」の「地(背景)」として機能し得ることを典型的に提示している。この見方を、小説 *Procés de contradicció suficient* (1975/76) のように直接的な体制批判とは扱われてこなかった作品にも応用することで、ジャンル間に見られる諷刺的言語使用の共通点や差異の分析も可能になるであろうことが示される。

10 月 5 日 (日) 【文学】② Domingo, 5 de octubre 【Literatura】②

『2666』における旅のモチーフについて

El motivo del viaje en 2666

高橋可恋 (Karen TAKAHASHI)

小説家ロベルト・ボラーニョの遺作『2666』(2666 2004) は、5 部構成からなり、第二次世界大戦以降の政治的暴力が米墨国境の町サンタテレサにおける女性連続殺人事件へと連鎖する様を描いている。先行研究の多くは、新自由主義やグローバリゼーションの下で構造化された暴力や、「悪」の不可視性をポストモダンの特徴として捉える。また、登場人物の多くが文筆家であることから、小説において書くことの持つ意味が分析され、その暴力性や限界、暴力的な現実への抵抗としての可能性が論じられている。

本発表では、この小説における旅や移動の描写に着目し、小説内で移動することがオルタナティブな現実を探索しようとする行為であり多くの場合で逃避でもあることを示し、旅が登場人物の人生自体と重ねられ、移動の停止が死を意味することを明らかにする。第 4 部はそれ以外のパートと対照をなし、報告書のような文体で女性の死体の描写を反復し、逃避が不可能である弱者が現代社会の構造的暴力の被害者として可視化されていることを指摘する。一方で他のパートに登場する批評家、学者、ジャーナリストは移動を繰り返しながらサンタテレサに接近し、精神的危機を経験するが、小説内で「世界の秘密」と呼ばれるものを暴くことができない。これらのパートは移動と同様に書くことの無意味、登場人物の置かれた虚無的状况を示す。例外的に作家アルチンボルディのみが第二次世界大戦中の旅の途中で無名のまま死んだ作家の手記を発見し、旅による探求の成果を得る。小説においてこの手記の存在は書くことが現実を変える力を持つと示すわけではないが、書き残すことが他者にむけて開かれた営みであると示唆する。この小説は大部分において書くことの無意味を表象するが、同時にこの小説の存在自体が小説内部の手記のように、たとえ虚無に帰すとしても旅と探求を続け、書き残すことによって断絶を回避しようとする姿勢を示す。

10 月 5 日 (日) 【文学】③ Domingo, 5 de octubre 【Literatura】③

サバルタンと階級的アパルトヘイト：フロイラン・トゥルシオスとロベルト・ソー
サの作品のポストコロニアル的・脱植民地的読み方

**El subalterno y el apartheid de clase: Una lectura postcolonial y decolonial de obras
de Froylán Turcios y Roberto Sosa**

Héctor Benjamín UCLÉS FLORES

El movimiento de literatura modernista en Honduras es una de las huellas imponentes que generaron el ideal oficial de la identidad hondureña. Una de las más insignes de estas fuerzas es la obra de Froylán Turcios (1875-1943), cuyos trabajos literarios son parte del canon educativo vigente. Este moldea la identidad del hondureño, con miras a generar un ciudadano patriota e ilustrado y una nación pujante económicamente, en el trasfondo de la obra existen las semillas para un "apartheid de clase", entre la modernidad y la "otredad". Esta modernidad estaba determinada por una identidad idealizada que se manifiesta hacia afuera de la nación en el "nativo informante", que busca desvincularse de todo proyecto no legitimado por la ilustración.

Como resultado, se produjo una sociedad con una identidad bifurcada, entre el "nativo informante" como imagen del éxito modernista-capitalista y el "subalterno" que existe como evidencia del fracaso del proyecto económico. Este fenómeno se contrasta con la obra literaria de Roberto Sosa (1930-2011), quien expone los fracasos del experimento modernista, ofreciendo una observación crítica hacia aquellos que quedaron excluidos del proyecto capitalista.

A través del andamiaje teórico de la filosofía postcolonial en Spivak, se hace un rastreo de las categorías del "nativo informante" hondureño, el "subalterno" y el "apartheid de clase" para analizar la obra de Froylán Turcios y Roberto Sosa. Se presta particular atención al fanatismo nacionalista caracterizado por la inmolación de la "otredad" interna o externa, en la obra de Froylán Turcios, que encuentra su crítica en el trabajo de Roberto Sosa que señala el fracaso del proyecto modernista y su intento de imponer un progreso homogéneo. Este progreso, al intentar desentenderse de lo señalado como falta de desarrollo, llevó a la nación hondureña al límite del proyecto: un esquema inclusivo discursivamente, que perpetúa un "apartheid de clase" a través de las ínfulas inmolatorias, pertenecientes a la ilustración, que busca imponer a la "otredad", en este contexto, los "subalternos", es decir, los desfavorecidos del modelo capitalista, se materializan en las víctimas de las aspiraciones modernistas.

Palabras clave: Nativo informante, Subalterno, Postcolonialismo, Honduras, Apartheid de clase, Spivak, Froylán Turcios, Roberto Sosa

10 月 5 日 (日) 【文学】④ Domingo, 5 de octubre 【Literatura】④

シルビア・モロイ『ありふれた忘却』*El común olvido*のクィアを読む

Sylvia Molloy: Una lectura queer de *El común olvido*

洲崎圭子 (Keiko SUSAKI)

アルゼンチン生まれのシルビア・モロイ Sylvia Molloy (1938～2022) は、父方に英国人、母方にフランス人の血を引き複数言語の環境で育ったのち、ソルボンヌ大学で博士号を取得、1972 年に米国プリンストン大学でテニユアを獲得した初の女性教授となった。その後没するまで、米国内のいくつかの大学で教鞭を取り、生まれ故郷に居を構えることはなかった。ラテンアメリカ特有の男性優位主義と文学の関連性についていち早く着目したロバート・マッキー・アーウィンとの共編著『ヒスパニズムとホモセクシュアリティ』は、1998 年の出版である。男らしさを讃える小説をジェンダーの視点から読むことや、自立した女性存在に興味があると述べるモロイは、ラテンアメリカ文学におけるレズビアンとゲイの表象研究という新しい分野における先駆となり、同文学批評の同性愛嫌悪傾向を有する言説を俎上に載せた最初の研究者の一人であった。

他方においてモロイは、パリを舞台に女性間の葛藤を描いた『不在証明書』(1981)をはじめとし、自伝的なテーマを中心に創作活動を実践した小説家でもあった。本発表においてはまず、彼女の研究者としての業績を当時の社会状況とともに概観したのち、二作目となった小説『ありふれた忘却』*El común olvido* (2002) で描かれた同性愛者の男性主人公が、母の遺言をかなえるべくニューヨークからブエノスアイレスを訪れることで、自身のアイデンティティを確立していった状況を見る。2001 年 9 月の米国同時多発テロ事件の直後に書き終えたとされる同作品は、アルゼンチンが軍事政権下にあった時代を背景としている。第一小説『不在証明書』において女性の同性愛者を主人公に据えた作家が、第二作目では社会規範から逸脱した男性同性愛者の困難を描写することをつうじ、既存のカテゴリーに収まらない人間存在の流動性を多角的に描こうと試みたことについて考察する。

10 月 5 日 (日) 【文化】① Domingo, 5 de octubre 【Cultura】①

グアム司教オラーノのメモ: 八紘一字と比較した、1943 年 5 月の『ニッポン・タイムス』における「バチカンの謎」について

Sobre las notas del obispo de Guam, Olano: «El enigma vaticano» en el *Nippon Times*, mayo de 1943, en contraste con hakkō ichiu (八紘一字)

長瀬由美 (Yumi NAGASE)

ミゲル・アンヘル・オラーノ・イ・ウルテアガ貌下は、第二次世界大戦中、日本占領下のグアム教会を指揮した最後のスペイン人司教である。彼は、追放された強制滞在先である日本で 1943 年 5 月 28 日付のニッポン・タイムスを読み、「バチカンの謎」というキーワードを抽出した。そして、これを 1942 年 1 月から 1943 年 9 月までの日本での強制滞在中につけていた日記である『日本の年代記』に書き残した。この年代記は、現在、パンプローナ（ナバラ州）のカプチン会管区歴史文書館に保存されている。同大戦にスペインは中立であったにも関わらず、ミゲル司教は追放されたのであった。

『日本の年代記』には、ミゲル司教の「八紘一字」の解釈が記されている。「八紘一字」とは、戦前・戦中、日本の支配下に世界統一を目指すために使われたスローガンであり、神武天皇の詔勅を基に 1903 年生まれ、軍事による日本の拡大と帝国主義の指針として機能していくことになる。

日本は、八紘一字の概念によって、東アジアをあたかも自分たちの所有物であるかのように支配する権利を持っていると自らに思い込ませていたが、これは世界的にバチカンが広く受け入れられていた事実と衝突していた。日本は、これを理解できずか、しようとせずか、バチカンとは「謎」なのである、としてある、とオラーノは言いたかったのではないか。

本稿では、年代記における司教ミゲルによる記述の解釈作業を行い、1) 司教のこの問題に対する理解がどの程度正確であったか、2) 日本人がなぜそのように考え、理解したのか、そして 3) 同司教は、当時の宣教の文脈において、これをどのように理解し、4) 年代記に書き残した意図は何なのか、を検証する。平和に貢献しようとするカトリック教会、これを率いる司教としての任務に、オラーノのこれらの記述がどのような役割を果たしているのかを吟味する。

本研究は、JSPS 科研費#20K01538 の助成を受けたプロジェクトから生まれたものである。

10 月 5 日 (日) 【文化】② Domingo, 5 de octubre 【Cultura】②

カシオドーロ・デ・レイナのもう一つの著作？—『スペイン異端審問の技法』について—

¿Otra obra de Casiodoro de Reina? —Sobre «Artes de la Inquisición española»—

吉田彩子 (Saiko YOSHIDA)

カシオドーロ・デ・レイナ (1520?-1594) は最初のスペイン語完訳聖書である『熊の聖書』(1569 年バーゼル) の翻訳者として知られるが、別の書籍『スペイン異端審問の技法』(1567 年ハイデルベルク) の著者ないし共著者とも言われている。彼は宗教改革派の拠点の一つとされるヒエロニムス会の聖イシドロ・デル・カンボ修道院 (セビリャ) で生活していた、異端審問所に捕えられる直前に逃亡した 12 人の修道士の一人であった。

スペインの「黒い伝説」を生み出した一因と指摘される『スペイン異端審問の技法』は、密告者の扱い方から自白を得るための拷問その他の方法、拘束中の被疑者の扱い、宣告式などの異端審問の方法を詳述した後に、具体的な事例と、セビリャの異端審問 (1557-1564) で有罪とされた 15 人の「殉教者」たちの簡略な伝記を付したものである。ラテン語で書かれたことが幸いして早々にフランス語 (1568 年)、英語 (1568 年と 1569 年)、オランダ語 (1569 年)、ドイツ語 (1569 年) に翻訳された。16 世紀末の「ベストセラー」とまで称される本書の出版ブームは 1625 年頃まで続いたと言われる。

拷問や処刑の記述で残酷なものに惹かれる「怖いもの見たさ」を刺激したことがこの人気の理由であるとか、事実の報告というよりも「才能のある書き手による」良く出来たプロパガンダであるという評価もあるのだが、本当のところはどうなのだろうか。

ハプスブルク・スペインにおける宗教改革運動を考察するための資料として『スペイン異端審問の技法』の重要性に留意したい。

10 月 5 日 (日) 【言語教育】① Domingo, 5 de octubre 【Didáctica】①

日本の大学のスペイン語授業における
インタラク션을重視したアクティビティによる情意・感情面の変容
**Transformación de aspectos afectivos y emocionales a través de las actividades
centradas en la interacción en clases universitarias de español en Japón**

横山友里 (Yuri YOKOYAMA)

相互交流を重視し、タスクを遂行することを目的としたやりとりや意味交渉の中で学習言語を習得していくタスクを基盤とした言語指導法は、積極的なインタラク션을前提とする。しかし実践上の課題として、語彙や文法知識の不足や学習言語使用時の心理的抵抗なども指摘されている (Swan, 2005、Burrows, 2008 など)。また、日本の大学における外国語教育において、インタラク션への積極的な関与が難しい学習者の様子やその要因も報告されている (Maftoon & Ziafar, 2013 など)。

そこで本研究は、タスクを基盤とした言語指導法を用い、インタラク션을重視した授業における学習者の情意・感情面の軌跡を詳細に解明し、より効果的な教育的介入の開発に役立てることを目指す。Maftoon & Ziafar (2013)は、インタラク션に影響を与える諸要因を分析しているが、実際に学習者がどのような情意・感情面のプロセスを辿るのかという点については十分に考察されていない。

よって本研究は、学習者に対して半構造化インタビューを行い、人間の発達の多様性などを時間の経過とともに記述する (サトウほか, 2025) 複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて学習のプロセスを分析する。TEA により情意・感情面の軌跡を視覚化することで、インタラク션을重視した教育的介入が学習者の情意・感情面をどのように変容させるのかを明らかにする。これにより、日本語話者の特性を考慮したインタラク션을重視した外国語教育への示唆を提供することを目的としている。

10 月 5 日 (日) 【言語教育】② Domingo, 5 de octubre 【Didáctica】②

ELE 教室におけるゲームの活用：スペイン語以外の専攻の学生のための伝統的およびデジタル教育レクリエーション教材
Gamificación en el aula ELE: material lúdico-didáctico tradicional y digital para estudiantes con especializaciones distintas al español

Alejandra María GONZÁLEZ DÍAZ DE TANAKA

La enseñanza del español a estudiantes con especializaciones distintas al español puede resultar un reto para el profesorado. En universidades japonesas, dependiendo de las carreras de estudio, los estudiantes deben elegir el estudio de una segunda lengua extranjera, además del inglés, para llegar a cumplir con los requisitos académicos de graduación. Nuestro estudio se torna a aquellos que eligen el español como segunda lengua extranjera.

La Gamificación en el aula ELE representa un método didáctico que apoya al profesorado. La investigación tiene como objetivo analizar cómo el uso de material lúdico-didáctico tradicional y digital puede impactar, es decir, aumentar o disminuir, el rendimiento e interés de dichos estudiantes durante un período de tiempo en el aula ELE.

En contexto del estudio, material lúdico-didáctico tradicional se refiere a juegos que se han utilizado durante mucho tiempo en entornos educativos convencionales. Los recursos incluyen cartas o láminas, juegos de mesa, dados, lápiz y papel, pelotas, entre otros objetos varios. El material lúdico-didáctico digital se refiere a los juegos digitales que se pueden acceder a través de dispositivos tecnológicos como computadoras, tabletas o teléfonos inteligentes. Los recursos incluyen aplicaciones, plataformas en línea, juegos educativos, vídeos, entre otros. Considerando que los estudiantes pertenecen a una generación meramente tecnológica, el estudio ha encontrado espacio para introducirles juegos tradicionales, los cuales se han desarrollado con un notable interés.

Tanto el material lúdico-didáctico tradicional como el digital traen consigo ventajas y desventajas que se discuten ampliamente en el estudio. Éstas se miden desde la perspectiva del profesor, así como también desde la perspectiva de los estudiantes. Desde la perspectiva del profesor los resultados en exámenes brindan una referencia objetiva significativa. Desde la perspectiva del estudiante, el interés y motivación en el estudio de la lengua, así como su compromiso con el estudio, brindan una referencia subjetiva significativa.